歴史的・地理的にみた衣服着装形式

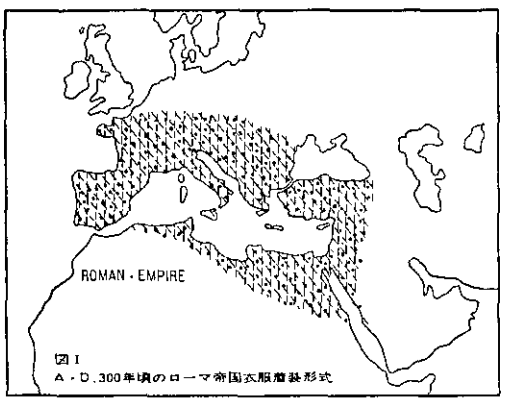
ローマ帝国崩壊期より東ローマ帝国爛熟期まで

福　山　和　子

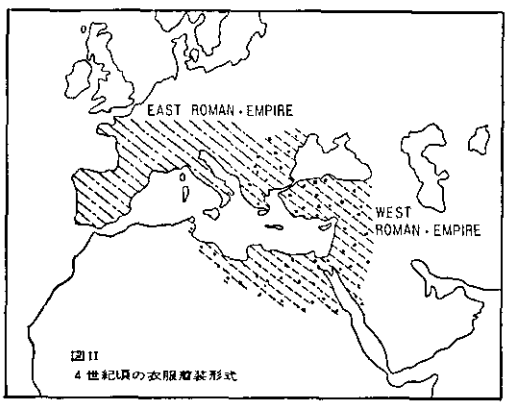
現在我々が着装している衣類の原型パターは，すべてある時代に集約されると言っても過言でない．それは，宗教と人間性との闘いの時期でもあったＢＣ４～５ｃに位置する．歴史を学ぶ一つの姿勢に，過去の流れから数流を選び出し，現点判断又は将来に推意するものがあるが，そのような思い上りでは決してなく，源流を溯り現代服装史の源流に浸って見る位の意図からこの章は始まる．それはローマ衣服形式とゲルマン民族服装の融合と，それによる多用化，それと密接に関連する政治・宗教との関連に於てである．

西欧の中世は，封建制度が支配し，人間の自由な行動を奪った時代であり、異民族の侵入によってギリシャ・ローマの古代文明が崩壊された時代である．それはまた，キリスト教万能の時代であった．禁欲的なキリスト教の精神は，神の霊魂を重んじ，現世的な人間の肉体には無関心な態度をとるに至り，かつてギリシャ・ローマの文化に見られた人間の持つ自然的肉体の美には，関心を示さなくなった．かくして，肉体の形が露に出る衣服，膚が顕われる衣服は避けられ，キリスト教の解釈によって，衣服は醜い人間の身体を被い隠すものとなる．

また一方，ゲルマン民族の移動・侵入により，



図Ⅰ
A・D.300年頃のローマ帝国衣服着装形式



図Ⅱ
4世紀頃の衣服着装形式

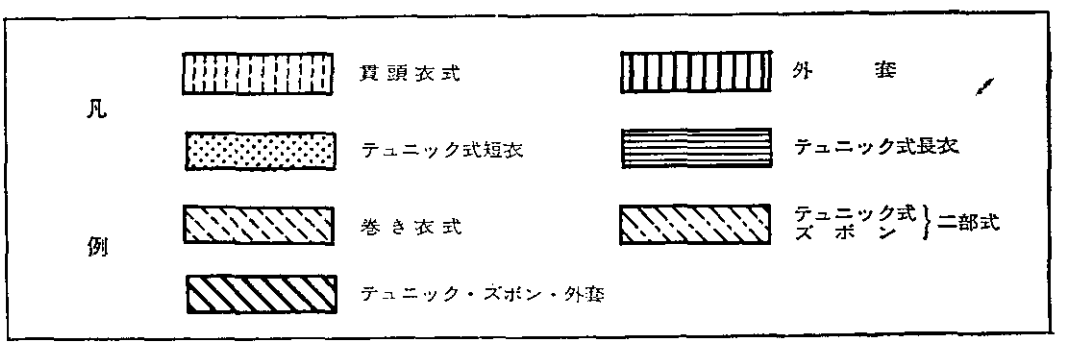


表 A　ゲ　ル　マ　ン

民族		男	
		服装	材料
フランク人	ライン河下流より大移動によりローマ領土を手中に治める．キリスト教を背景に民族統制国家建設等確実に遂げ，ゲルマン人の中で最も高い文化をもった民族．	袖口や膝下が括つてある長ズボン．幅広のベルトをして膝丈のテユニック． 外套としてサグムを必携．	粗ラシャ 革
ゴール人	現在のフランス国の一部に住んでいた部族で，古くからローマ文化に接していた．	腰丈のテユニックを着，長ズボンを穿いてサグムを用いた．	ゲルマン人は一般に織物の技術に優れていたが，ゴール人の間で特に盛んである． ラシャ製
テュートン人	定住することを避け，移動を続けた部族．	原始的野性的で二枚の毛革を身体の前後にあて，肩と脇を閉じ合せた膝上までのもの． 腕と足は露出． その後織物を使うようになって二枚の布片を肩で結び．丈は長く，脇は開いたままで胴を細帯でしめた．	毛革 ラシャ 麻布
ゴート人	他の部族より王制の発達したテュートン系の部族	長ズボンと膝上のテユニックサグムを用いた． 外套やズボンの裾に鋸歯状の装飾がついているのが特色．	麻布 ラシャ
ブリトン人	ケルト系の一派． 初期ローマの影響を多分に受け，7世紀末までには，フランス人やサクソン人の影響を受ける．	戦争的色彩が強く装飾性は乏しい 膝丈テユニック，膝下革ひもでくくる．長ズボン． 外套	ラシャ 麻布
アングロ・サクソン人	テユートン系の一派． 5世紀頃にブリテンに渡った民族	袖の短い腰までのテユニック． 膝下を革紐で巻く長ズボン． 毛皮のサグムを用いる．革ベルトでテユニックをとめる．	ラシャ 毛革

民　族　衣　服

		女			
着装構成	構成形式	服　　装	材　　料	着装構成	構成形式
ズボン・テユニック	二部形式	丈長のテユニツクに幅広のベルトを締める． 半円型の外套．	ラクダ・羊毛製の布	テユニック 外套	一部形式
ズボン・テユニック サグム	二部形式	丈長のスカート，膝丈のテユニックで，幅が広く，乳下を細帯で締るのが普通．	ラシャ	スカート・テユニック	二部形式
貫頭衣 テユニック	一部形式	初期は男子同様． ローマ化によってテユニックを着るようになる．	毛革 麻布	テユニック 貫頭衣 袈裟式テユニック	一部形式
ズボン・テユニック サグム	二部形式	テユートン人と同じ 貫頭衣，袈裟衣式テユニックを着用	麻布 ラシャ	テユニック (貫頭衣・袈裟衣式)	一部形式
ズボン・テユニック	二部形式	丈長のテユニック，半円または円形の外套を用いる．	麻布 ラシャ	テユニック 円形外套	一部形式
ズボン・テユニック サグム	二部形式	直線裁ちにした柔かい布製の短袖のテユニック．その上に長方形の布を前後に垂し，両肩を止め，ベルトを締めた．毛足の長い毛皮の外套を用いた．	麻布 ラシャ	テユニック 外套	一部形式

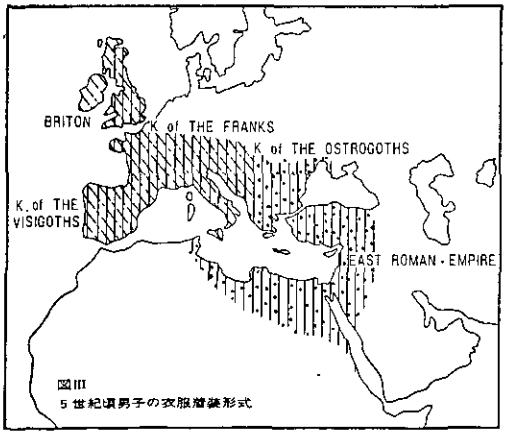
衣服の着装形式が，ローマ衣服とゲルマン衣服の融合したものがでてくる．中世における被服は，ギリシャ・ローマ的な被服形式を土台とし，キリスト教的肉体観と，ゲルマン的被服構成の上に成立していった．

476年，西ローマ帝国はゲルマン人の侵入によって亡びた．これによって社会の構造・文化等，新しい方向付けがなされ，服装史においても，服飾の形態や性格の上に多大な変化をもたらし，現代服の萌芽をみ，一大転換期となった．

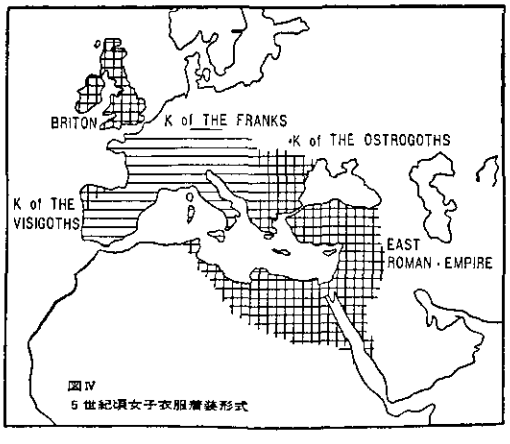
ゲルマン人は好戦的な民族で，その生活はタキトウスの「ゲルマニア」によれば，「戦争に出ない時，彼らは日々幾分狩猟に，より多くは睡眠と飲食に耽りつつ，無為に日を過す．最も強装にして，最も好戦的なものといえども，すべてみずからは些のなすところなく，家事・家庭・田畑一切の世話をその家の女・老人，その他すべての劣弱なものに打ち任せて，みずからただ懶惰にのみ打ち暮す」とあり，ゲルマン人は狩猟と遊牧を主とするアーリア人の一派で，荒涼とした森林の中で，粗野で未開な民族である．男子服装の主体は武装である．「彼らは公事と私事は問わず，何事も必ず武装してでなければ行なわない」（タキトウスの「ゲルマニア」より）によって理解される．更に「武器を帯びることは，邦家（土地共同体）がその資格があると認めるまでは一般に何人にも許されない習いである」（タキトウスの「ゲルマニア」より）と一定の資格がなければ武装が許されなかった．また「その認められた時，同じその集会において，長老らのあるもの，或いは〔その青年の〕父，または親近のものが，楯とフラメア（細い短い刃の手槍）とをもって青年を飾る．これが彼等の間に於けるトガであり，青年に対する最初の名誉である」（タキトウスの「ゲルマニア」より）とあり，武器を帯ることは邦家の正員として認められたことであり，兼ねて一個の自由民たることの証明であった．しかし，これはローマ人のように，特権や財産を服飾によって表現することではない．日常の衣服は，野獣の皮，あるいは麻布を身体に合わせた活動的構成であった．女子は，タキトウスの「ゲルマニア」によると，「彼等は，女には神聖にして予言者的なる或るものが内在していると考え，而して，それ故に女の言をしりぞけ，あるいはその答えを軽んずることはしない」また，「彼女らは見世物の誘惑や宴席の刺激に損なわれることなく，よく貞潔を守って一生を過す」とあり，彼等は道徳的に極めて厳格であった．故に家事を司どる女子は，家内労働が中心の生活で，服装は非活動的で良く，幾分派手であるが，華美にながれることはない．このように男女の服装の目的がはっきり区別されて，全く異った着装構成がなされた．

丹野郁著「西洋服飾発達史」を参考にしながら，ゲルマン民族の服飾を調べると表Aになる．

ローマ領土を占領したゲルマン人は，ローマを支配するというより，ローマの高度な文明を



図III
5世紀頃男子の衣服着装形式

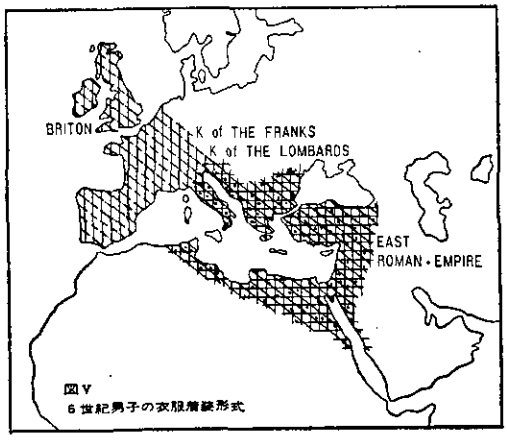


図IV
5世紀頃女子衣服着装形式

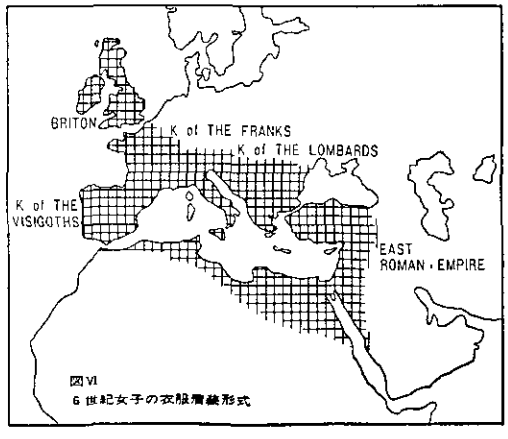
尊重しながら摂取し，これを同化し，発展させていった．そこであらゆる面がローマ化したのに対し，服飾様式融合の点ではゲルマン調が目立っている．ドレーパリーの美的な服装を誇りとしたローマ人にとって，ゲルマン民族が着用していたズボンは奇異に感じ，ローマ服に入るためにはかなりの時間と困難があった．これはゲルマン人のローマ人に対する割合いが稀薄で，全領地を平均して約2.8％であるということからも普及には困難な所があった．しかし機能的で，実用的であるというズボンのもつ特性は，社会的要求のもとで普及していった．ゲルマン人が次第に文化的になると共に，文化国家ローマやビザンチンに倣って，大体同じ被服を纏うようになってしまう．そして下半身着として使うズボンにゲルマン民族固有な風が残っていたにすぎなくなる．図Ⅰ～Ⅵ参照．

壮大な西ローマが，ゲルマン民族の侵入によって亡び去った一方，東ローマ帝国は，ローマ文化・ギリシャ文化に新しい文化を添加していった．東ローマ帝国はコンスタンチノープルを中心に，ビザンティン帝国を築いていった．コンスタンチノープルは，ヨーロッパとアジアの接する地点にあり，そのため東方のあらゆる文化と直接に接触する機会が多かったため，ローマ文化を土台に東方的文化を添加した形になった．それ故，政治体制は東方的帝王制が強化され，文化面では神秘的要素が増大して，象徴的な観念性が重んじられた．しかし一方，キリスト教によって，すべてが厳粛で，この神権宗拝によってもたらされた壮厳味と威光は，ビザンティン服飾の最も特徴とするところでもある．これは人間を主体とし，ありのままの肉体とその動きに美を見い出し，精神と肉体そのものに理想美を求めたギリシャ・ローマ芸術の本質と異なった．故にそれまでの衣服は，その肉体と精神を助けるように構成されていたが，ビザンティン帝国では人間不浄の姿を現わすことを嫌い，すべて神聖化しなければ礼賛しないキリスト教によって支配された．

一方，東方思想の流入は文化面やさまざまな文物・技法をも輸入した．これはギリシャ的簡素美を複雑化し，豪華で多彩なビザンティン文化を築いていった．それは服飾面では，ギリシャ・ローマ服のドレープにみる繊細な感覚や美しさは，ビザンティン服には見ることはできず，金属的装飾や織物において，その外観の相違を知ることができる．またギリシャ精神を宿しながら，超人間的な厳粛味を融合させなければならなかったところにここに住むキリスト教徒の特性があったと考え，更に古来の服飾を思い切って変質させ，特色あるビザンティン服飾様式を確立していった．一方，キリスト教によって「妻たるもの汝らはその夫に従うべし」，「キリストは教会の首なる．夫は妻の首なり」「男は神の像，神の栄光なり，されど女は男の栄光なり」等，聖書の教は女性の従属的な地位を強化していった．その思想が女子の優美・華麗・非



図Ⅴ
6世紀男子の衣服着装形式



図Ⅵ
6世紀女子の衣服着装形式

活動的服装形式の発展を方向づけた．西欧女子の服装は，キリスト教の信仰心とともに発展していったといってよい．

ローマの服装がビザンティン服として特徴が表われるのは6世紀頃からで，服飾によって威光さ，厳粛性を表現しようとする傾向が強く，そのために布地や装飾にその効果を求めた．被服材料は絹織が中心で，シルクロードからの絹織物，熟達した刺繍技術，宝石類の流入は東ローマ住民の欲望を満し，服飾を華美に導いていった．

ビザンティンの衣服は(図Ⅲ～Ⅵ参照)，古代ローマ的な形態の上に東方的な豪華な装飾で満されたもので，材料は絹の他に金襴・錦の織物それに刺繍を施したもの，宝石類を散在したものが使用される．これは現実の身体性を否定するキリスト教の精神にほかならず，金銀や華やかな色彩を現実的人間観にとって変らせ，宮廷や寺院の内部と共に，そこに参集する人々の衣装をも豪華に飾った．これは「ラヴェンナ聖ウィターレ寺のテオドラ皇后とその宮女達（モザイク画)」等にしられる．

女子の服装――初期はギリシャ服の伝統を受け次いでいたが，三世紀頃より特色あるトウニカ・ダルマティカ・パルラの中心服装形式ができあがる．下着的要素の多いトウニカの上にワンピース形式のダルマティカを着用．これは貫頭衣式の筒型で，首と腕を通すところが開いている．布地はほとんどが無地で，肩から裾に2本のクラヴィが装飾され，胴に美しいベルトを締めるのが普通である．最外装にローマ風のパルラを着用するが，6世紀頃になるとパルダメントウムが使用された．これは初め皇帝が着用していたもので，色彩豊富な布地を使用，衿元にエジプトからの影響を受けたと思われる装飾がなされたものであり，これを女帝が使用するようになる．更に貴族の女性や，殉教女に用いられるにいたった．「聖ヴィターレ寺のモザイク画，テオドラ皇后像」「聖アポリナーレ・又オヴオ寺の殉教女の行列」によって知ることができる．

着装構成方法は次の如くである．

1）トウニカ・ダルマティカ・パルラ
2）トウニカ・ダルマティカ・パルラ・ヴエール
3）トウニカ・ダルマティカ・パルダメントウム
4）ダルマティカ・ヴエール

男子の服装――男子服は，ギリシャ・ローマ服を土台に，トウニカ・ダルマティカ・外套の着装形式を発展させていった．肩着的要素の多いトウニカの上に，筒袖のテュニックであるダルマティカが着られ，その上に装飾的要素の多い外套を着用．外套の種類はパルダメントウム・パリウム・ペスラがあり，パルダメントウムは初期には短形・梯形・半形・四分の三円等あり，いずれも一片の布を左肩にかけて，右肩を止め金でとめていたが，6世紀より丈は次第に長くなり，時には足首まで達し，威厳を増し，装飾的要素が極限に達した．材料は初期には，比較的厚地であって，ほとんど装飾されていなかったが，上級服化するに従い装飾化していき，高貴な印として四角形の装飾等がなされるに至った．ダルマティカには二つの形式があり，袖のやや細いローマ時代の末期とほぼ同形と，袖口の太い丈の長いものとがある．一般にはローマ風ダルマティカの上に，パリウムが巻きつけられた．これはローマ服のドレパリーの自由性と，流麗な外観を求めたものである．これは「聖ヴエーターレ寺天井のモザイク画」にみることができる．この時代の男の着装構成は次のようである．

1）トウニカ・ダルマティカ・外套（パルダメントウム・パリウム・ペスラ）
2）トウニカ・外套（パルダメントウム・ペスラ）

庶民階級の服装は，女子はトウニカ・ダルマティカか，ダルマテイカだけで，材料も実用的なもので，装飾はほとんどなく，色調も地味であった．男子はトウニカ・ダルマティカか，ダルマティカが多く用いられていたが，次第に西欧諸国のものと共通し，トウニカ・ブラコ，ト

ウニカ・ホーサの型式か，それに外套サグムが用いられるようになった．ブラコやホーサは，ゲルマン民族のズボンで，6世紀以後になって，ゲルマン人や東方民族の影響で，長ズボンがあらゆる階級に現れ始めた．

中世初期の西欧の他諸国の服装

東ヨーロッパ――ビザンティン帝国，ハンガリー，ポーランド，ロシア

西ヨーロッパ――フランス，ドイツ，イギリス

北ヨーロッパ――デンマーク，スウェーデン，ノルウエー

南ヨーロッパ――イタリヤ，スペイン

等の国々が，ヨーロッパでは築かれつつあった．これらの国々は，教会を中心に封建制度が確立され，中世国家の地盤を築いていった．封建社会を背景とする服飾は，その主体をゲルマン服とローマ服との融合におきながら，それらとは全く異なった衣服を形成していった．これについては次稿に回す．

ゲルマン民族衣服の西欧衣服えの影響と，中世初期の特色

縫製技術の成長――西欧における古代服と中世服の違いは，被服材料として動物性の獣皮や獣毛を用いるのと，植物性の繊維を織って用いるところにある．しかし，単に材料の物質的な区別だけの問題に止まらない．特に獣皮は植物繊維を紡ぎ，織り布とする場合のように，自由な広い幅の布地が得られるのではない．ある限られた形と面積しかない．そこで，このような材料をもって被服をつくり上げるには，材料を切ったり，針と糸で縫い合す工夫が自ずと生れる．また限られた面積では被服を上下に分け，すなわちズボンと上衣，スカートと上衣の様な型式が有利な条件になる．（西洋被服文化史・元井能著）古代服は結ぶ・止めるという技術で非成形被服あるいは半成形被服であったが，中世初期には縫い合わせる・かがるという針を使って縫製する技術が生まれ，成形被服に発達する．これは北方民族の移動による新しい技術の流入によるところが多く，ゲルマン服にその特色をみることができる．更に古代服に見られない布地に装飾を施す技術をも同時に成長させていった．これは衣服の性格が，キリスト教の精神的影響を受けた為と同時に，東洋文化の影響にもよるものである．これはビザンティン帝国の衣服にその特徴をみることができる．

ズボンの常用――ズボンの形成は，古代ペルシャにそれをみることができたが，西欧に常用されるに至ったのは，ゲルマン民族の移動によってである．ズボンの誕生は，寒冷地に住み狩猟生活が中心の生活は，この機能的で保温性のあるズボンを作り出していったが，ローマ服に於ける繊細なドープの感覚をもつローマ人は，ゲルマン人の常用するズボンを受け入れ難たかった．しかしズボンの持つ機能的な面は段々と着用者を増して行き，その後，西ローマだけでなく東ローマの高貴族達にも用いられ，ここに現代までのズボン形式の確立をみたのである．

男女服の区別――ローマ服，或いはギリシャ服においては，丈の短長はあっても，着装構成は男女とも同じであったが，ゲルマン人の侵入により男女服がはっきり区別される．これはゲルマン人の狩猟生活中心の男子と，極めて導徳的で家内労働中心の女子は，自ずと衣服形式を異にしていった．この時より，ヨーロッパを中心に現代に到るまで，男女服が区別されていった．

宗教の衣服への影響――ビザンティン衣服に見られる特色である．ギリシャ教とユダヤ教の歴史の流れの中にあるキリスト教は，原始的衣服目的から新しい衣服目的を作り出していった．原始衣服の目的は，装飾性よりも身体保護であり，それによる機能性と美を追求したものであった．キリスト教の普及と生活文化の向上は，衣服を機能美だけに留らせず，装飾性を主体とした衣服に変質させていった．これはキリ

スト教が教会を中心に普及し，教会員の資格として衣服形式を構成し，宗教・教会・教会員を通して階級的衣服形式を構成していったのである．それは同時に，女子の服装を明確化していった．

服装史に登場してくる着装形式は，貴族・政治・経済に直接関係する人々，国事に関する人々の服装が中心である．であれば，宗教の場であり乍ら，社交の場であり，ある面では国事参加の場である教会が舞台となり，その宗教の思想がその構成を決め，更に社会思想にまで影響を及ぼしたのである．しかし宗教・教会は支配階級だけのものとなり，庶民は教会に関係なく，極て初歩的な機能的・実用的な服装形式である．これは社会的・人間的に多くの問題を含むのでキリスト教の服装史への影響については，別稿にしたい．

型紙構成の萌芽――古代衣服においては，獣の毛皮や布地を体に合せて止める構成をなしていたが，ゲルマン服ビザンティン服には，一枚の布地を身体に合わせて着用するようになる．その為には裁断・縫製の技術が必要になり，型級構成の萌芽をみたのである．

以上，ゲルマン服・ビザンティン服について，その構成及び後世服装史への影響について述べた．

参考図書

最新世界史地図　吉川弘文館
世界史の研究　吉岡　力　著
西洋服飾発達史（古代・中世）　丹野　郁　著
世界美術大系　講談社版
西洋被服文化史　元井　能　著
服装の歴史　ハニ・ハラルド・ハンセン　著　原田理恵・近藤　等　訳
ゲルマーニア　タキトウス　著　田中秀央・泉井又之助　訳
Carolyn G Bradly: Western World Costume.
Blanche Payne: History of Costume.